

【算数科】

1 昨年度の授業改善推進プランの検証・評価

○単元のまとめでは、ステップ学習のたしかめプリントを使用し、学習の定着度合によってチャレンジプリント、フォロープリントに取り組みせることを継続して行った。東京ベーシックドリル診断テストを各学期に行い、児童一人一人の習熟度合いを把握し、日々の学習に活かした。

○問題解決学習の流れに沿った指導に取り組むよう学習計画を立て、習熟度に合った課題に取り組みせた。

△ノートの書き方については、学年や発達段階に応じて、共通のルールで指導していく必要がある。

△自分の考えを説明させる際に、一部の児童に偏る傾向がある。タブレットPCを用いて、自身の考えが全体に共有される場を設定したり、それぞれの考えの良さについて伝え合う場を設定したりすることで、意見を発信し交流する意義を実感できるようにする必要がある。

2 今年度の調査結果の分析と結果に基づく課題

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
調査結果の分析	知識・技能については、5年「角の大きさ」以外の項目で、どの学年も目標値及び全国、区の平均正答率を上回っていた。 校内の昨年度の平均正答率と比較すると、どの学年も上回っていた。項目ごとに見ると、4年「かけ算」5年「小数」「分数」「概数」「角の大きさ」で下回っていた。	思考・判断・表現については、どの学年も目標値及び全国、区の平均正答率を上回っていた。 校内の昨年度との平均正答率と比較すると、どの学年も上回っていた。	主体的に学習に取り組む態度については、どの学年も目標値及び全国、区の平均正答率を上回っていた。 校内の昨年度の平均正答率と比較すると、どの学年も上回っていた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> コンパスや分度器等の技能が身に付いていない児童が25%いたため、基礎的な技能の定着が課題である。 物の重さをイメージする問題や、式の意味と場面と結び付ける問題、計算結果を比較して答える問題など、計算結果を受けて思考する問題は、目標値に近い正答率であった。そのため、思考・判断・表現の面では、児童の日常生活の経験と学習したことを活かして表現する学習を重ね、知識を活用できる力を養うことが課題である。 複数の学年で、数の表し方や倍数についての理解、3桁以上または小数の四則計算で、目標値に近い正答率の問題があった。上記の内容を活用する単元では、基礎的な内容の定着を図りつつ学習を進めることが課題である。 		

3 授業の具体的な改善策

教科目標	<p>学習指導要領の教科の目標</p> <p>数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次の通り育成することを目指す。</p> <p>(1) 数量や図形などについての基礎的・基本的な概念や性質などを理解するとともに、日常の事象を数理的に処理する技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 日常の事象を数理的に捉え見通しをもち筋道を立てて考察する力、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見だし統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり目的に応じて柔軟に表したりする力を養う。</p> <p>(3) 数学的活動の楽しさや数学のよさに気付き、学習を振り返ってよりよく問題解決しようとする態度、算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度を養う。</p>
全体	<p>主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善</p> <p>既習の内容を生かし問題解決学習の流れを身に付ける。筋道を立てて考えたり説明したりする資質能力を育成するために、自分の考えを発言したり、友達の考えを聞いたりして、より考えを深める学習を進める。また、児童が問題を解決したいと意欲を喚起させる発問や教材提示などを工夫する。</p>
学年段階別改善策	
低学年	<ul style="list-style-type: none"> 自力解決の時間を十分確保し、図や式、自分の言葉などで伝える力をさらに高める。 長さや水のかさ等、身の回りの量を扱う単元では、具体物の操作をさらに取り入れ、単位を扱う技能を高める。 文章から情報を読み取り立式する場面では、具体物の操作や場面を図で表現することにさらに取り組むことで立式の技能をさらに高める。 計算の基本となるたし算やひき算、かけ算九九は、繰り返し学習し、知識の着実な定着を図る。
中高学年	<ul style="list-style-type: none"> 見通しをもつ→自力解決(絵、図、式、言葉等)→友達と考え方の交流→全体の交流→検討→適用問題という、問題解決の流れを四則計算や面積の問題の場面で取り入れ、筋道を立てて論理的に考える力を身に付ける。 児童の思考に、具体的に表現できているか、今までの学習を活用しているか、簡潔に表現できているかなど様々な視点から価値付けることで、異なる考え方を取り入れる良さをさらに感じられるようにする。 コンパス・分度器等、道具を扱う単元では、習熟度に応じて、基礎的な使用方法を確認する時間を取り、道具を使用する技能を高める。 習熟度別指導の特性を生かし、具体物の活用や演習問題の準備など、習熟度に合った教材や支援の方法をさらに取り入れ、学級担任や算数少数指導担当教員、講師、補習講師の連携をより密にし、児童の学習状況を見取り、習熟を図る。